

シナリオ 隼
人と過ごした
日々
～1991年夏・
仙台～



雪姫

みゆき（M）「今年も広瀬川に灯籠流しの季節が訪れた。

あれからもう10回目の夏。

河原に設置されたステージでは、浴衣姿の高校生たちが流行りの曲を器用に演奏している。

あの頃、私と隼人が通った高校は広瀬川のすぐ近くにあった。

放課後はよく河原に下りて小石を投げ合ったり、貝殻を探したり、ある時は授業を抜け出して、草むらに寝転んでただぼんやりと空を見ていたり。

そんな風にあの頃の私は日々のほとんどを隼人のそばで過ごしていた」

音楽（バンドの練習の音）

隼人「今のところもう1回！」

メンバーたちの声（複数）「OK！」

音楽（バンドの練習の音）

隼人「誠二、そこちょっと音ずれてねえか」

誠二「わりい」

隼人「もう1回行くぞ」

音楽（バンドの練習の音）

みゆき（M）「日の射さない地下の小さなスタジオで、バンドの練習に明け暮れる隼人の横顔を、私はいつも見ていた」

隼人「よーし今日は終わり！」

メンバーたちの声（複数）「お疲れ」

隼人「明日な」

みゆき（M）「練習が終わり、誰もいなくなったスタジオで、隼人と二人きりになれるほんの少しの時間だけが私のすべてだった」

隼人「悪い、みゆき。かなり時間オーバーだな、暇だったろ？」

みゆき「ううん。隼人たちを見てるだけで、私楽しいから」

隼人「（笑）俺達動物園のサルかよ」

缶ジュースのプルトップを開ける音

隼人「あのさ、みゆき」

みゆき「ん？何？」

隼人「俺さ、高校卒業したら東京に行くよ」

みゆき「え…」

隼人「決めたんだ」

みゆき「大学はどうするの」

隼人「大学には行かない。俺、やっぱり音楽 を続けたいんだ。このまま夢あきらめて田 舎の3流大学出てさ、どっか適当に就職して、サラリーマンやって、そんな人生まっ

ぴらなんだ。バンドの連中とも話し合った。 あいつらも一緒に行くって言ってくれてる」

みゆき「東京に…」

隼人「仙台にいたってチャンスなんか永遠にこないだろ。俺、どうしてもこの世界でプロになりたいんだ」

みゆき「隼人…」

隼人「必ずプロになって、みゆきを迎えにくる から」

みゆき「でも…東京に行ったら、ずっと帰ってこないんでしょう」

隼人「しばらくは帰ってこれないだろうな」

みゆき「そうか、東京に行くんだ…」

みゆき (M) 「私は、隼人のまるで自分自身に必死で語り聞かせているかのような言葉の前で、ただ黙り込んでいた。何か言わなくちゃ。心の中でそうあせればあせるほど、何も言葉が出てこなかった」

隼人「わかってくれるよな」

みゆき「うん…」

隼人「(ホツとしてため息) でも俺、みゆきと離れるのが、一番辛いんだよな」

みゆき「ねえ、隼人」

隼人「ん？」

みゆき「私も卒業したら、一緒に東京に行くよ」

隼人「え？」

みゆき「うん、決めた。私も東京に行く。いいでしょ」

隼人「だっておまえ…」

みゆき「私も隼人と離れたくないもん」

隼人「でもみゆきは短大に進学するんだろ。子供が好きだから、将来は保母さんになりたいって、いつも言ってたじゃないか」

みゆき「それはそうだけど」

隼人「それにおまえんとこの親がそんなもん、許してくれんのかよ」

みゆき「どう…かな」

隼人「無理だよ。それに東京に行くって言ったって、俺達何のあてもないんだぜ。おまえを連れてくなんてできないよ」

みゆき「そんなことどうでもいいの」

隼人「だけど…」

みゆき「もう決めたの。私も隼人と一緒に東京に行く」

隼人「みゆき…」

みゆき (M) 「私を抱き寄せた隼人のぬくもりが悲しいくらい暖かくて。隼人の腕の中で私は短い夢を見ていた」

女子高生たちの声 (放課後)

みゆき「祐子。今日時間ある？どこかに寄ってかない？」

祐子「いいけど…珍しいじゃん。みゆきの方からどっかいこうなんて。彼とのデートはいいのお？」

みゆき「ちょっとね。相談があるんだ」

祐子「うん、いいよ」

ハンバーガーショップ。店内の音。

祐子「相談って隼人くんのこと？」

みゆき「うん、実はね…」

店内の音。

祐子「東京に？」

みゆき「そういうこと」

祐子「でもみゆき、短大は？短大に進むんでしょ」

みゆき「隼人と同じこと言ってる」

祐子「だって・・・もう願書出してるじゃない。試験は来月だし、突然過ぎるよ」

みゆき「進学、あきらめようと思うの」

祐子「ええっ」

みゆき「短大に行ったら、最低でも2年間は隼人と会えないわけでしょう。私、少しでも隼人と離れていたくないんだ」

祐子「気持ちはわかるけど・・・親にはもう話したの？」

みゆき「それなんだよね」

祐子「みゆきのお父さん、確か国家公務員だったよね」

みゆき「うん」

祐子「彼と付き合ってること知ってるの？」

みゆき「ううん、話してない」

祐子「ちょっと許してもらうのは難しいわね」

みゆき「やっぱりそう思う？」

祐子「みゆきのお父さん、きびしそうだもん」

みゆき「そうだよね」

祐子「ねえ、一体どうするつもりなの？もう1月も終わりだよ。試験もうすぐだよ。学校の方だって・・・そうだ、担任も説得しなくちゃ。できるの？これから進路を変えるんだよ」

みゆき「うん・・・」

祐子「あのさ、人ごとだと思って言うわけじゃないけど。短大を卒業してから考えても遅くないと思う。その方が・・・」

みゆき「ねえ祐子」

祐子「ん？」

みゆき「今私にとって一番大切なのは、短大に行くことでも、保母になることでもない。隼人なの。隼人が今の私の一番の宝物なの。隼人と離れ離れになってまで手に入れたいものなんかない。隼人がいなかったら何の意味もない」

祐子「みゆき・・・」

みゆき「いざとなったら私、家を出る覚悟でいるの。ううん、そうでもしなきゃ絶対東京になんか行けない。そのつもりなの」

祐子「そこまで考えてるの」

みゆき「祐子にだけはわかってほしいんだ」

みゆき「みゆきがもう決めたんだったら何も言わないけど。でも大変だね」

みゆき「何とか頑張るつもり。祐子」

祐子「ん？」

みゆき「応援してよね、祐子にしか言えないから」

祐子「当たり前じゃない！」

みゆき「サンキュ」

テレビの野球中継の音。

ガチャガチャと食器を洗う音。

みゆき「あの、お父さん」

父「おっそこだ、よし、打て。打て打て！」

みゆき「お父さん話があるの」

父「ちょっと待て。今いいとこなんだ」

みゆき「進学のことなんだけど」

母「お父さん。みゆきが何かお話があるみたいですよ」

巨人が凡退したことを告げるアナウンスの声。

タバコに火をつける音。

父「全く。せっかくのチャンスが…で、何だって？進学？」

みゆき「黙ってみゆきの話聞いてほしいんだけど。お母さんも座って」

母「どうしたの。改まって」

みゆき「みゆき、短大には行きません」

母「ど、どういうことなの？みゆきちゃん。（父に）お父さん……」

父「おまえ、短大に行かないでどうする気だ。専門学校にでもいくのか。それとも就職するつもりか。どっちなんだ」

みゆき「どっちでもない。私卒業式が終わったら東京に行くつもりなの」

母「東京ですって？何行ってるの、みゆきちゃん。ちゃんと説明してちょうだい」

みゆき（M）「私は両親に初めて隼人とのことを話した。隼人がバンドをやっていて、プロになるために東京に行くこと、そして自分も彼についていくことにしたということを一気にしゃべりまくった」

父「おまえ、本気で言ってるのか」

みゆき「はい、本気です」

父「くだらないこと言うのはやめなさい。そんなことお父さんが許すとも思っているのか。ばかばかしい」

母「そうよみゆきちゃん。ばかなこと言うのはよして」

みゆき「別にばかなことじゃない。本気だもん。私東京に行きます」

父「いいかげんにしろ！いつまで言っているんだ」

みゆき「いいかげんな気持ちで言ってるんじゃないの」

父「おまえ、大体東京に出て一体どうするつもりだ？え？向こうで何をするつもりでいるんだ」

みゆき「何って」

父「生活はどうする気なんだ。バンドだか何だか知らないがそんな男と一緒にいてまともに生活していけると思ってるのか。18にもなって甘えたこと言うのはやめなさい」

みゆき「でももう決めたことなの。お父さんに何て言われてもみゆきの考えは変わりません」

父「勝手にしろ！その代わりそんなに東京でその男と一緒にするというならたった今この家を出ていきなさい。さっさとどこへでもいけ」

みゆき「わかった」

階段をドタドタと駆け上がる音

母「みゆきちゃん！待ちなさい」

ドアがバタン！と閉まる音。

みゆき（M）「自分の部屋に入ると私は父との言い争いで高ぶった感情のまま、ボストンバッグに洋服や下着を詰め込み始めた」

母「みゆき？みゆきちゃん。開けなさい」

ドアをノックする音。

母「あけるわよ」

ドアが開く音。

母「みゆきちゃん、何してるの」

みゆき「出ていくの」

母「出ていくってどこに行くのよ」

みゆき「わかんないけど」

母「今ね。お父さんとも話していたの。さっきの話、あまりに突然だったからお母さんたちも驚いたけど、頭ごなしに叱らないで みゆきちゃんの考えをじっくり聞いてあげようって。ね、だから待ちなさい」

父「みゆき。家を出てどうするつもりなんだ」

みゆき「…」

父「答えなさい」

みゆき「家を出ていけっていったのはお父さんでしょ。私は本気なの。家出したって東京に行く」

父「まあいいから座りなさい」

母「(ため息)」

父「おまえが東京に行きたいという気持ちはよくわかった。わかったけれどもお父さんが思うのはそんなに急ぐ必要はないんじゃないかということだ。きちんと短大を出て から東京に出たってちっとも遅くはない。 そうだ、一度その隼人くんとかいう子を家 に連れてきなさい。話はそれからだ」

母「そうよ。みゆきちゃん。何で今まで隠してたの。親に内緒でこそこそ付き合うなんて良くないわよ」

みゆき（M）「私は黙っていた。隼人を親に紹介する気など全くなかった。そもそも隼人が家に来る訳がないし、両親が隼人のことを気にいってくれるとも思えない。両親にバンドのことなんか理解してもらえないはずがない。私はかたくなにそう思い込んでいた」

父「進学しないということについてはお父さんは何も言わない。他にやりたいことがあるというならそれでいい。しかしだ、おまえが男を追いかけて東京に行くために進学をやめるというなら話は別だ。わかるな」

母「（ため息）」

父「まあ良く考えてみなさい」

ドアの閉まる音

みゆき（M）「父が決して許してくれないことは私が一番よく知っていた。それでも両親に自分の気持ちを伝えることができただけで私は満足だった。散らばったままの部屋で私は自分の思いがますます強くなっていくのを感じていた」

音楽

隼人「悪い、遅くなって。寒いだろ」

みゆき「平気」

隼人「これからみんなと飯食いに行くんだけどおまえも行くだろ」

みゆき「うん行く」

隼人「家の方、大丈夫か」

みゆき「大丈夫よ」

ラーメンをすする音

隼人「やっぱ冬はラーメンに限るな」

誠二「いよいよ俺達もあと1か月後には東京だな」

春樹「いよいよだなあ」

俊彦「ここまで来たらがんばるしかないっしょ」

春樹「東京かあ」

みゆき（M）「帰り道。風の音だけが鳴り響く真冬の公園を私たちははしやぎながら歩いた。空

っぽの学生カバンを私に預けたままバック転をしてはしゃぐ隼人を、目で追いつけるのが楽しかった」

隼人たちのはしゃぐ声

誠二「は一疲れた」

みゆき「もう騒ぎ過ぎだよ」

誠二「みゆきちゃんさ、東京でるつもりなんだって」

みゆき「聞いたんだ」

誠二「あいつ悩んでたぞ」

みゆき「隼人が？」

誠二「俺達東京に行くっていったって向こうでどうやって食っていくのかとか何も決まっていな。そんな状況で自分の彼女を連れていくとなれば男は悩むさ」

カサカサと落ち葉を踏みしめる音

誠二「あいつ…みゆきちゃんと離れるってことでも相当悩んでたからな。みゆきちゃんが一緒に行くといってくれて嬉しかったとも言ってたよ」

隼人たちのはしゃぐ声

誠二「本当に行くのか」

みゆき「どうして」

誠二「あいつは音楽も女もなんて器用にできる奴じゃないぜ」

みゆき「わかってる。けどそれでいいの。別に私何も望んでないから」

落ち葉の音。

みゆき (M) 「3月。卒業式。その日仙台の町は最後の力を振り絞るように細かい粒の雪がちらついていた。式が終わったその足で隼人たちは東京行きの電車に乗ることになっていた。私は、式が終わるとすぐ、泣いている同級生の間を通り抜けて駅へと急いだ。いつのまにか私の制服の肩にも雪が積もっていた」

駅構内のざわついた音。

隼人「みゆき、俺達一足先に行くから。必ず来いよ。待ってる」

みゆき「うん。必ず行く。約束する」

隼人「落ち着いたら連絡するよ」

電車が遠ざかる音。

みゆき (M) 「それから1週間ほどして隼人からハガキが届いた。男にしてはちょっと丸っこい懐かしい文字。東京での住所と連絡先、そして簡単な近況報告。最後に『早くみゆきにも来て欲しい』と書いてあった」

みゆき (M) 「初めて東京行きの話を持ち出した時に比べると、父も母も大分落ちついてきていた。結局短大の試験を受けなかった私に二人とも半分あきらめていたんだと思う」

トントンと包丁で野菜を刻む音。

みゆき (M) 「日曜日の朝。父は居間で新聞を広げ、母はキッチンに立ち、朝食の用意をしている。今までと何も変わりのない朝の風景だった」

母「できましたよ。ほらみゆきちゃん運ぶの手伝って」

みゆき (M) 「母の声に私はキッチンに行った。いつもの席。温かいご飯。ネギの浮かんだお味噌汁。卵焼き。私の好きなイタリアンサラダ。私は箸を取る前に両親に話そうと思った。今日これから東京に立つということを」

みゆき「お父さんお母さん。」

両親が黙々と食事をする音

みゆき「私今日東京に行きます」

母「みゆきちゃん、(父に)お父さん…」

父「まあいい」

母「でも」

父「とにかく食べなさい。まだ時間はあるんだろ」

みゆき「はい」

みゆき (M) 「私は何も言わない両親の思い を痛いほど感じながら黙々と箸を動かし続 けた」

みゆき「ごちそうさま」

箸を置く音

みゆき「それじゃ…」

父「待ちなさい。駅まで送って行くから」

みゆき「お父さん」

母「みゆきちゃん。向こうについたらちゃんと連絡してね。体に気をつけるのよ」

みゆき「はい」

母「お母さんあなたのこと信じてるからね」

みゆき「ごめんね、お母さん」

車が発進する音

みゆき (M) 「駅に着くまで父は一言も話をしなかった。私もバッグを二つ膝に抱えて、 黙ったまま窓の外を見ていた」

車が停車する音

みゆき「送ってくれてありがとう、お父さん」

父「本当に東京に行くのか」

みゆき「はい」

父「金はあるのか」

みゆき「少し」

父「これからどうするのか決めてあるのか」

みゆき「何とかやってみる」

父「まあやってみなさい」

みゆき「必ず連絡するからねってお母さんに 伝えといて。じゃあ行くね」

みゆき (M) 「歩き出した私の背中に、父の 「気が済んだらいつでも帰ってきなさい (父の声)」 低い呟きにも似た言葉が突き刺さった」

車が走り去る音

みゆき「お父さん…ありがとう…ごめんなさい」

駅構内のざわついた音

祐子「みゆき！」

みゆき「祐子！来てくれたんだ」

祐子「当たり前じゃん、親友なんだからさ。でもほんとに行っちゃうんだね」

みゆき「うん」

祐子「頑張ってねみゆき」

みゆき「ありがとう。祐子もね」

祐子「隼人くんたちプロになれるといいね」

みゆき「そうだね」

みゆき

(M) 「そして私は隼人の待つ東京へ一人で旅立った。これからのことは何も決まっていなかったけれど、不安なんかひとかけらもなかった。在るのはただ隼人の側で暮らしたいという強い思いだけ。18年間暮らした、見慣れた町の風景が束になって後ろに流れていった」

電車の音

みゆき (M) 「約2時間後。私は東京駅に下り立った。行き交う人の多さに戸惑いながら改札口を出ると、そこでメンバーのみんなが私を待っていてくれた。その中に、会いたかった隼人の笑顔」

みゆき「隼人…来たよ」

隼人「おう」

みゆき (M) 「お互い交わす言葉はそれで充分だった」

みゆき「もうこっちは随分暖かいね」

隼人「コートなんかぬいじゃえよ。ところで 昼飯まだだろ」

みゆき「そういえばまだ」

隼人「とりあえず飯食いに行こうぜ。俺らも 朝から何も食べてないんだ」

誠二「もう腹減って死にそうだよ」

メンバー「ラーメン行こうぜラーメン」

ラーメン屋。店内の音

誠二「俺達さ、今アパートにみんなで住んでるんだ」

春樹「それがさ何と6畳一間。ワンルーム。そこに男4人で寝てるんだぜ、想像できる？」

俊彦「そのアパートってのも今時こんなのあり？ってくらいのぼろさでさ。みゆきちゃんも見たらびっくりするぜえ」

みゆき (M) 「隼人はメンバーたちの会話にはまざらず黙々とラーメンをすすっていた。私は少しだけ不安になり、隼人を見た。立ちのぼる湯気の向こうに何よりも大切な隼人がいた」

踏み切りの音

電車が通り過ぎる音

みゆき (M) 「隼人たちが共同で住んでいるというアパートは、なるほど「メゾンサンタモニカ」という名前とはひどく不釣り合いの、木造アパートだった」

ガチャリとドアが開く音

みゆき (M) 「中に入ると、ツンとかび臭い匂いがした。隅の小さな流し台には、カップラーメン

の空き容器が積み上げられていた」

誠二「な、言った通りだろ？」

春樹「まだ何にも揃えてねえしな。何とテレビもないんだぜ。悲惨すぎるよ」

俊彦「今時信じらんないよな、こんな生活」

誠二「あるものっていったら楽器と楽譜くらいのもんか」

みゆき「いいじゃない。それで」

メンバーたち「えっ？」

みゆき「確かにこの部屋には立派な家具も大きなテレビも広いベランダもないけど、代わりにみんなの夢がたくさんある。それだけで充分じゃない」

誠二「夢さえあれば生きていける…か」

春樹「あ、じゃあ…俺達買い物行ってくるわ。今夜食べるもん何にもねえし」

隼人「そんなじゃ俺も」

誠二「あ、おまえはいいよ。（小声で）ここに残ってろよ。じゃあ、みゆきちゃんゆっくりしてって。じゃああとでな、隼人」

隼人「ああ」

ドアが閉まり、メンバーたちが出て行く音。

隼人「あいつら気をきかしたつもりかな」

みゆき「かもね」

隼人「その辺座れよ。適当に」

みゆき「うん」

隼人「疲れただろ」

みゆき「ううん」

隼人「今みんなでバイトしながら何とかやってる」

みゆき「頑張ってるんだ」

隼人「おやじさんは許してくれたのか」

みゆき「…」

隼人「そうかそうだよな。許してくれるわけないよな」

みゆき「でも気にしないで。いつかきっとわかってくれると思う。隼人はそんなこと心配しないで」

隼人「けど、俺、おまえの親父さんの気持ちもわかるような気がするから」

みゆき「私が幸せだったらそれが一番の親孝行だと思う。そうでしょ」

隼人「だけどさ。見ての通り俺達まだこんな生活だし、みゆきを幸せにできるかどうか正直わからないんだ。だから・・・」

みゆき「私は、隼人のそばにすることが幸せなの。ほんとなの。それだけけでいいの」

隼人「みゆき…」

みゆき (M) 「隼人と私の視線がからみあった。私達は久しぶりの、そして東京に来て初めてのキスをした」

音楽

みゆき (M) 「翌日、私は早速地図を片手に不動産屋巡りを始めた。日が暮れかける前には何とか小さなアパートが見つかった。その部屋を借りるために仙台から持ってきたわずかばかりのお金はすべて消えてしまった。次の日にはスーパーのレジのバイトも見つけた。東京での新しい生活が始まった」

スーパーの店長「みゆきちゃん、お疲れ。もうあがっていいよ」

みゆき「はい、お疲れ様でした」

タッタッタツと足音

隼人「おう、みゆき」

みゆき「隼人！ 迎えに来てくれたの」

隼人「俺もさっきバイト終わったから」

みゆき「オフィスビルの警備だったっけ。仕事大変じゃない？」

隼人「まあな。まあ金のためだ。仕方ないよ。あ、あのさ。俺、今度みゆきのアパートに越してもいいかな。もう、あいつらと一緒にじゃいいかげん狭くてさ」

みゆき「それはかまわないけど…」

隼人「ゆっくり曲作りもしたいし。最近暇がなくて全然書いてないんだ」

みゆき「だったら隼人バイトやめれば？その方が曲作りに専念できるでしょ」

隼人「やめるわけいかないだろ。生活もあるんだし」

みゆき「任せて。私バイト増やすから」

隼人「だめだよ。そんなみゆきにばっか負担かけるわけには」

みゆき「隼人たちの曲が認められて、デビューしたらその時ちゃんと返してもらおう」

隼人「みゆき…。俺、おまえがそばにいてくれてほんと良かったよ。サンキューな」

みゆき (M) 「そんな隼人の言葉一つで疲れ切っていたはずの身体に元気がわいてくるのを感じた。それから私は二人分の生活費を稼ぐために夜もスナックで働き始めた。身体はきつかったけれど、隼人が部屋で待っていてくれる。そう思うとどんな辛いことでも我慢できた。誰にも邪魔されることなく隼人と二人だけの時間がもてる。そのためならなんでもできる。そう思った。このまま二人でずっといられるならー」

みゆき「ただいま」

ドアが開く音

隼人「ちくしょう！」

みゆき「どうしたの？隼人。酔ってるの？」

隼人「どいつもこいつも俺をばかにしやがって」

みゆき「隼人、何が合ったの」

隼人「今日さ、応募してたオーディションの二次審査があつてさ。確かにすげえ奴等いっぱいいたし、俺達まだまだだつて思い知らされたよ。けどさ、みんな頑張ったんだぜ。精一杯頑張ったんだよ。なのに審査員の奴、しょせん人まねだつて言いやがった。人まねしてるうちは使い物にならないって。ちくしょう…」

みゆき「だったら、人まねじゃないもの作ればいいじゃない。隼人にしかできないもの。ね？」

隼人「(フツと笑って) おまえはいいよな。音楽のこと何にもしらねえから簡単に言えてよ」

みゆき「わかんないよ。でも私隼人の作る曲好きだよ。大好き。こんなにいい曲なんだもん、いつか絶対わかってくれる人がいるよ。ね？だから…」

隼人「ちくしょう！今に見てろ。あんな奴等 絶対にいつか見返してやる！」

みゆき (M) 「オーディションで落選するたびに隼人の心がすきんでいくのがわかった。私はそんな隼人をただ励ますことしかできなかつた。季節はいつのまにか、東京で二度目の春を迎えようとしていた」

隼人「みゆき。今日おまえバイト休みだろ。久しぶりに外にメシ食に行こうか」

みゆき「うん！じゃあラーメンにしよう」

ラーメン屋の店内の音

隼人「俺さ、もし今度もだめだったら仙台に帰ろうかと思うんだ」

みゆき「えっ！？どうしたの、急に」

隼人「これだけやっても芽が出なかつたら才能がないってことだよ。これ以上俺のわがままであいつらの人生引きとめたくないし、おまえのこともな。もうこれ以上、俺のためにみゆきを犠牲にしたくない」

みゆき「犠牲だなんて私はそんなふうには思っていないよ」

隼人「でもみゆき昼も夜も働いて俺がいなかつたらそんな苦労しなくていいんだぜ」

みゆき「私は好きでやってるんだからー」

隼人「俺が苦痛なんだよ」

みゆき「隼人」

隼人「もういい。決めたんだ。今度のオーディションで最後。もしだめだったら一緒に田舎に帰ろう。な」

みゆき (M) 「隼人にはずっと夢を追い続けていて欲しい。そう言いたかったけれど、目の前で苦しんでいる隼人を見ていたら、とても酷なような気がして私は何も言えなくなっていた」

音楽

みゆき（M）「隼人がこれで最後といったオーディションの最終審査の日。私はただひたすら部屋で電話を待っていた」

電話の音

みゆき「はい、もしもし」

隼人「（はずんだ声で）みゆき！俺俺」

みゆき「どうだったの？」

隼人「それがさ、聞いてくれよ！今日俺たち音楽プロデューサーって人に声かけられてさ。今回優勝は無理だけど、ちょっと気になるからもう一度デモテープ聞かせてくれないかって」

みゆき「すごいじゃない、それって認められたってことでしょ」

隼人「いや、まだわかんないけどさ。とにかくできるところまでやってみるよ。俺。田舎 帰るのはそれからでも遅くないしな」

みゆき「うん、そうだよ。チャレンジチャレンジ」

隼人「うん。あ、今からメンバーとデモテープ作り直すから今日はそっちに帰れない
かもしれない。たぶん徹夜になる」

みゆき「わかった。頑張ってるね、隼人」

隼人「サンキュ」

電話を切る音

みゆき (M) 「久しぶりに聞く隼人のはずんだ声。仙台にいた頃よく聞いていた、高校生の頃の隼人の声。私は隼人が隼人に戻ってくれたことがただ嬉しくて。はしゃいでいた」

ガチャリとドアが開く音

隼人「みゆき！やった！やったよ」

みゆき「何、どうしたの」

隼人「俺達もしかしたらマジにデビューできるかもしれない」

みゆき「ほんとに？」

隼人「うん。言っただろ、この前プロデューサーに声かけられたって。その人、じっくり俺達のテープ聞いてくれてさ。そしたら、曲はまだまだだけど、歌詞が素直でいいってほめてくれて。それで、俺の声質は今の時代に合ってるから受けるかもしれないって」

みゆき「すごい…すごいよ隼人！やったじゃない」

隼人「ああ。何か突然チャンスが巡って来たって感じで…。夢みたいだな」

みゆき「何言ってるの、隼人たちの実力でしょ。才能が認められたんだよ」

隼人「うん、みゆき、もし俺がデビューしたらさ、おまえ仕事やめろよな。それでさ、こんな狭っ苦しい部屋さっさと出て広いマンションで暮らそう」

みゆき「最高」

隼人「もう少しだもう少しだからな、待ってろよ、みゆき」

みゆき (M) 「それから、信じられない程とんとん拍子に隼人たちのデビューが決まった。バンド名は『政宗』。隼人たちに声をかけたというプロデューサーがメンバーの出身地にちなんでつけたそう。目の前に敷かれた一本のレールの上を隼人は全速力で走り出した。同時に隼人が部屋に帰らない日も多くなってきた。それでも私の中では寂しさより嬉しさの方が勝っていた。もう隼人の沈んだ声を聞かなくてもいい。隼人がようやく夢に向かって歩き出したんだから。それに隼人は「もう少し」と言ってくれた。もう少し待っていればずっと二人でいられるんだ。私は唇をかみしめるようにして一人の時間を過ごしていた」

ガチャリとドアが開く音

みゆき「お帰り隼人。最近帰らないから…良かった。今夜は一緒にご飯食べられるよね」

隼人「うん。食うよ」

みゆき「すぐ何か作る」

隼人「みゆき。俺さ、とりあえずここ出るわ」

みゆき「出るって？」

隼人「マネージャーが、マンション借りてくれるっていうんだ。まだメンバーたちと一緒にけど、前のアパートとは全然違うし、それに俺、一応芸能人になったんだぜ。いくらなんでもこんなところじゃまずいだろ」

みゆき「私は…？どうしたらいいの？」

隼人「まだ、みゆきと暮らすことはできないよ。マネージャーの奴がうるさくてさ。でももう少しだ。俺の曲が売れて誰にも文句を言わせない立場になったらみゆきを呼ぶからさ。それまで悪いけどガマンしてくれ、な」

みゆき「うん。待ってる」

みゆき (M) 「私は自分に言い聞かせるようにうなづいた。もう少し。もう少し待って いれば—
。翌日。隼人は部屋を出ていった」

音楽

みゆき (M) 「隼人たちはデビューしてすぐたちまち人気が出た。それまで毎日のようにあった隼人からの電話が2日おきになり3日おきになり、1週間連絡がとれない時
もあった」

電話の音

隼人「はい」

みゆき「隼人？ごめんね仕事中に。最近ずっと電話くれないからどうしたのかと思って」

隼人「悪い。今めちゃくちゃ忙しいんだ。取材とかの仕事も増えたし、曲も作らなきゃなんねえし」

みゆき「そうだろうけど…声が聞きたくて」

隼人「俺…もう前みたいにみゆきと会えな いかもしれない」

みゆき「どういうこと」

隼人「マネージャーにくぎ刺されちゃってさ。女はまずいって」

みゆき「え？何？意味がわかんないよ」

隼人「ほら、俺ら今が一番大事なときだろ。女の子のファンも増えてきてるし、移動の時なんかキャーとかいわれちゃって結構大変なんだ。そんな時に女がいることがばれると人気に影響が出るっていうかさ」

みゆき「…私はどうすればいいの？」

隼人「できれば…仙台に帰って欲しい」

みゆき「隼人。本気で言ってるの」

隼人「勝手なのはわかってる。みゆきは何も悪くない。でもやっとなつかんだチャンスなんだ。こわしたくないんだ。わかってほしい」

みゆき「そのためには私が邪魔だっていうの」

隼人「そんなことないよ。けど、仕方ないだろ。みゆきだって俺がここまでくるのにどんなに大変だったかわかってくれてたよな。な？頼むよ」

みゆき (M) 「心の中で何かが音を立てて壊れていくのがわかった。お腹の中に小さな命が芽生えたことに気がついたのはそれから数日後だった」

駅のホームの音

急いで走っている音

誠二「みゆきちゃん…みゆきちゃん！」

みゆき「誠二くん」

誠二「良かった間に合って。今日仙台に帰るって聞いたから」

みゆき「わざわざ来てくれなくてもいいのに。忙しいんでしょ？」

誠二「俺…あいつのこと絶対に許さないよ」

みゆき「誠二くん」

誠二「あいつ今周りに流されて自分のことが見えなくなってるんだ。これまで支えてくれたみゆきちゃんにこんな仕打ちするなんて俺は許さない」

みゆき「もういわないで。何かよけいみじめになっちゃう」

誠二「あ、ごめん俺そんなつもりじゃ」

みゆき「結局は全部自分が決めたことだから。隼人を追いかけて東京に来たのもこうして田舎に帰るのも。誰のせいでもない」

誠二「ごめんな俺、何も力になってやれなくて」

みゆき「そんなことない」

誠二「あのさ、みゆきちゃん。間違ってたらごめん」

みゆき「何？」

誠二「みゆきちゃん…もしかして妊娠してる…なんてことないよね」

みゆき「（驚いて）どうして…？」

誠二「やっぱりそうなのか？実はこの前偶然 産婦人科からみゆきちゃんが出てくるの見かけて、それで…もしかしたらって」

みゆき「そう…」

誠二「隼人はこのこと知ってるのか？」

みゆき「ううん。知らせてない」

誠二「何でだよ！早く知らせた方がいいよ、そしたらあいつだって…」

みゆき「いいの」

誠二「いいのって…どうするんだよ。俺が こんなこと言ってもしょうがねえけど、こういうのって早い方がいいんだろ。俺、何言ってるのかよくわかんねえけど」

みゆき「隼人には黙ってて」

誠二「一人で、どうするんだよ」

みゆき「もう決めてるから」

誠二「ほんとにそれでいいのか」

みゆき「うん」

誠二「あいつに何か言いたいことがあったらー」

みゆき「ずっと。応援してるからって。そう言ってて」

誠二「わかった…伝えとく」

電車の音

みゆき (M) 「私は北へ行く電車に乗った。小さなバッグ2つと夢だけを持って東京に来た18の春。もうあれから3年の月日が流れていた。私は21歳になっていた」

父「帰ってきたのか」

みゆき「はい。お父さん、私一」

父「とにかくもう遅い。今夜はゆっくり眠りなさい」

みゆき (M) 「久しぶりに会った父は増えた白髪の方だけ何だか優しくなったような気がした。3年間ろくに連絡もせず、突然帰ってきた娘に、何も言わず黙って背中を向けた父に私は心の中で何度も頭を下げた」

音楽

佐野「おまえたち最近どうした？今度の曲30位にも入ってないぜ。このままだとよくある一発屋で終わっちゃうぞ」

隼人「俺はいいバラードだと思いますけどね。これからですよ」

佐野「おまえら今度もだめならもう仙台に帰れ」

隼人「そんな！」

佐野「CD売れない奴に金かけられるほどこの世界甘くないんだよ」

隼人「待って下さい」

佐野「とにかく次で最後だ。いいな」

ドアが閉まり、佐野が出ていく音

隼人「ちくしょう、手のひら返しやがって！」

誠二「隼人」

隼人「何だよ」

誠二「今のおまえには、どんなに努力しても人の心に響くような曲は作れないんじゃないか」

隼人「なんだと」

誠二「ちょっと話がある。こいよ」

ドアが閉まる音

隼人「話ってなんだよ。誠二」

誠二「みゆきちゃんのことだよ」

隼人「みゆきの？あいつがどうかしたのかよ」

誠二「俺、みゆきちゃんに頼まれたからずっと黙ってたけど。今ならもう話してもいいんじゃないかって」

隼人「だから何だよ。じれってえな」

タバコに火をつける音

誠二「おまえ、みゆきちゃんのこと一体どう思ってたよ。あんなにおまえのこと信じてずっと俺達支えてくれたのに一人ぼっちにさせてさ、何とも感じねえのかよ」

隼人「うるせえな。そんなことおまえに関係ねえだろ。俺もう帰るぞ。おまえとくだらねえ話してる暇ねえんだよ」

誠二「さてよ。俺、おまえがみゆきちゃんと別れた時心底おまえを許せねえと思った。でもおまえの才能はみとめてた、だから政宗に残った。でもてめえの女一人幸せにできないやつがよ、そもそもラブソングなんか歌えるわけねえんだよ」

隼人「うるせえ。おまえに俺の気持ちなんかわかんねえよ。女にうつつぬかしてたらな、すぐに誰かに追い越されちまうんだよ。佐野のやつも行ってただろ。甘くねえんだよ」

誠二「みゆきちゃん、妊娠してるぜ」

隼人「え」

誠二「俺のカンだけど、みゆきちゃん生むつもりだと思う。まだどっかでおまえを待ってるんじゃないかな」

隼人「嘘だろ…だってあいつ仙台帰る時一言もそんなこと・・・」

誠二「子どもをダシにしておまえを引き止めるようなことしたくなかったんじゃないのか。あの子、そういうところあるだろ」

隼人「みゆき・・・」

誠二「せめておまえに黙ってたみゆきちゃんのそういう気持ち、わかってやれよ。」

隼人「…」

誠二「俺、正宗ぬけるわ。もうおまえにはついていけない」

誠二が出ていき、ドアの閉まる音

隼人「みゆき・・・ごめん、俺・・・ごめんな」

川の流れる音

隼人「ここに来ると高校生の頃を思い出すな」

みゆき「よく授業サボって二人できたよね」

隼人「そうだな。もうずいぶん昔のような気がするよ」

みゆき「だってもう昔だもん」

小石が川に沈む音

隼人「みゆき」

みゆき「ん」

隼人「悪かった」

みゆき「隼人」

隼人「俺、自分のことしか考えてなかった。おまえのこと考えてやれる余裕がなかった。ほんとに自分勝手だった」

みゆき「謝るなんて隼人らしくないよ」

隼人「ほんという俺こわかったんだ。おまえがそばで支えてくれればくれるほどこわかった。このままはいあがれなくなるような気がして。でも誠二に言われてわかった。俺は結局みゆきに甘えてたんだ。男だったら全部引き受けて歩いていかなきゃきやい けないんだよな」

みゆき「隼人」

隼人「仕事が残ってるからどうしても今夜中に東京に戻らなきゃなんないけど、またすぐ迎えに来る。そしてもう一度俺とおまえとお腹の中の子どもと3人で暮らそう」

みゆき「え…」

隼人「絶対に迎えに来るから」

みゆき「ほんと？信じていい？」

隼人「うん。みゆき。今度こそ幸せにする」

みゆき「隼人・・・」

みゆき（M）「広瀬川は抱き合う私達のそばでいつもと変わらずに、流れていた。遠い海を目指して、ただひたむきに流れていた」

高速道路の音

車が急ブレーキをかける音

ガシャーンと激しく車のぶつかる音

みゆき（M）「東京に向かう途中で隼人の乗った車が事故にあったという知らせを受けたのはそれから2時間後だった。まだ私の肩に腕に髪に隼人のぬくもりが残っていた」

雨の音

お経を読み上げる声

誠二「みゆきちゃん、これあいつの部屋にあったテープ。たぶんみゆきちゃんのために作った曲だと思う」

みゆき「隼人が私のために？」

誠二「あいつが生きていたらみゆきちゃんに真っ先に聞いてほしかったんじゃないかな」

音楽（隼人が歌っている）

みゆき（M）「テープからは隼人の歌声が流れてきた。もう隼人の身体はこの世のどこにもいなくなってしまうのにこの中には隼人が生きている。私は隼人が死んでから初めて声を上げて泣いた」

みゆき「（泣く声）」

みゆき（M）「皮肉なことに『政宗』は隼人が死んだ後、再び人気を盛り返した。隼人の残した曲はメモリアルソングとして若者の間で話題に上りたちまちヒットチャートをのぼりつめた。それから1ヶ月後、残されたメンバーたちは突然『政宗』の解散を

ファンに告げ、芸能界から静かに消えていった」

広瀬川。ブラスバンドの音楽と人々が行き交う声。

誠二「ここは変わらねえな。俺たちはずいぶん変わったのに。広瀬川だけはあの頃のままだ」

みゆき「他のみんなは元気なの？もう何年も会ってないけど」

誠二「春樹はあのまま東京に残ってサラリーマンやってるし、俊彦は結婚してこっちにいる。確か嫁さんの実家の会社を手伝ってるはずだよ」

みゆき「誠二くんは？」

誠二「俺？家業ついで和菓子屋の若旦那」

みゆき「誠二くんちのお菓子おいしかったもんね。あの頃良く食べた」

誠二「結局隼人だけが今でも21のままか。何もかもが夢だったのかもしれないな」

みゆき（M）「私は息子の圭太と一緒に灯籠をそっと水辺に置いた。オレンジ色の光が川に溶け合うようにゆっくりと流れに沿って滑り出した」

圭太「ねえ、お母ちゃん。これってどこまで流れて行くの？」

みゆき「お父さんのいるところまでよ」

圭太「ふうん」

みゆき（M）「灯籠は何度か草むらに姿を隠しながらやがて見えなくなった。圭太の肩を抱きながら『隼人に帰って来て欲しい』私は痛切にそう思った。できるなら私も強くなりたい。どんな時でも淡々と流れ続けるこの広瀬川のように。10年の時が流れ、今ようやくすべてのシーンが思い出という名に形を変えて私の中を通り過ぎていった」

音楽